

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2172000545		
法人名	有限会社ケアコスモス		
事業所名	グループホームほのぼの2号館		
所在地	岐阜県中津川市福岡3441-1		
自己評価作成日	令和5年11月8日	評価結果市町村受理日	令和6年2月15日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaipokensaku_mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&JkyosyoCd=2172000545-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター ぴーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和5年11月27日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

木造平屋1階建ての温かみのある空間で、職員全員が基本理念(・隣に座る・その人を知る・ゆっくりと穏やかに)に沿った介護を心掛けています。1ユニット単独のこじんまりしたグループホームの良さを職員各自が自覚して行動できるよう普段から管理者・計画作成担当者・看護師や介護従業者間のコミュニケーションを密にとれるように力を入れています。ホームの周りは、木々など豊かな自然に囲まれており、静かな環境の中にあります。週に1度のドライブや季節毎の行事(花見、紅葉見学など)を楽しんでおります。重度化に伴い、医療連携の見直しをし、自然な看取りの体制も整ってきています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設から19年になる事業所は、当初の基本理念に沿って、利用者一人ひとりの生活リズムを守り、自然豊かな環境の中で、利用者主体の家庭的なケアに努めている。食事も出来るだけ手作りで提供し、利用者と職員が季節感ある食事を一緒に食している。コロナ禍でも、地域の感染拡大状況を見て、感染予防対策をした上でドライブを継続したり、利用者の様子を動画で家族に配信している。また、3年ぶりに花見と外食行事を実施するなど、利用者を楽しませている。代表でもある管理者は、ケアマネジャー、看護師、介護職員、調理職員、運転手等、全従業者とコミュニケーションを図りながら、働きやすい環境作りにも取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
43	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:15)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	50	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:8,9)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
44	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:14,27)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	51	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人が訪ねて来ている (参考項目:2)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度ある 3. たまに 4. ほとんどない
45	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:27)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	52	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:3)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
46	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:25,26)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	53	職員は、活き活きと働いている (参考項目:10,11)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
47	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:36)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	54	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
48	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:20)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	55	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどいない
49	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:18)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	その人を知るという事を大切に、地域と共という地域密着型の基本理念を掲げて、その理念に添った実践を心掛けている。理念の掲示することで再確認している。	利用者本位の支援を実践するためには、先ず、本人を知る事であるという基本理念を挙げている。分かりやすい理念は、職員が常に目にするよう玄関やホールに掲げ、その実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域清掃、事業所を知ってもらう取り組みが出来ている。コロナ後、断ち切れていた地域とのつながりを再開するべく運営推進会議の場で模索している。	日中、利用者は庭仕事や外に居る事が多い。時々、敷地外に出ることもあるが、地域の人の声掛けや見守りを得ながら、本人本位の生活を継続できている。買い物は地元スーパーを利用するなど、地域密着を自然な形で実践し地域とのつながりができている。	
3	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議は定期的で開催し、ご家族の他、地域関係者や、消防署、人権擁護委員、民生委員の方々が出席されている。命のボトル設置等の成果がある。	7月から対面での運営推進会議を開催している。3年振りの会議で、市担当者から「会議開催は運営基準で決められていること」の説明があり、意見交換が行われた。2回目は敬老会と併せて開催し、出席者に五平餅の昼食を提供するなど、雰囲気作りを工夫しながら参加者から意見を引き出している。	
4	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	2ヶ月毎にある介護相談員の訪問、運営運営推進会議へ福岡総合事務所担当者が参加して下さる等、連携を取っている。またグループホーム部会でも行政担当者の参加がある。	法人は2カ所でグループホームを運営していたが、コロナ禍で一方の事業所を休止し、行政と連携しながら事業所の実情にあった運営に努めている。再開した運営推進会議で助言を得ながら、協力関係を築いている。	
5	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所の身体拘束マニュアルに従い、運営推進会議やケアカンファレンス等で勉強している。現在の所、身体拘束をしないケアが出来ている。	身体拘束適正化検討委員会を定期的開催し、議事録も整備している。職員研修会では資料を配布した上で、LINE等を活用しながら意見交換し、拘束しないケアの実践に取り組んでいる。	
6	(6)	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	ケアカンファレンスへの職員参加率も高く、知識、意識の向上に役立っている。日々の言葉遣いにも気を付けており、当然身体拘束はいたしません。	ケアカンファレンスの中で、身体拘束適正化検討委員会及び虐待防止について、職員間で話し合っている。議事録は身体拘束のみの表記なので今後、事業所の現状に即して、虐待防止委員会も併記していく予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者様の1人に成年後見制度利用者がみえる。必要時相談、連絡を管理者窓口にて行っている。		
8		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関しては、利用者の疑問点等を解決しながら行っている。改定の場合は事前に文書を作成し、了承を得てから進めている。		
9	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議、訪問、電話等の時の提案、相談に対応している。	コロナ禍でも面会は感染対策をした上で実施し、家族の訪問時に意見や要望を聞いている。LINEを活用して動画で利用者の様子を伝えるなど、家族とのコミュニケーション強化に努めている。「利用者家族等アンケート」は、内容が変わらないことや入居歴が長い利用者が多く、回答率は低い。	
10	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のカンファレンス、日々の質問等にて意見交換を行い、改善等行っている。要望を言える環境を心掛けている。個人的にはラインにて、希望、要望意見を受けている。	毎月のカンファレンスには、夜勤者以外は出席している。管理者は、職員が意見や要望を出し易い環境を作り、個人的な相談等は、LINEで対応している。記録の電子化やホームページの開設等の準備を進めている。	
11	(9)	○就業環境の整備 代表者は、管理者及び職員個々の努力や実績、勤務状況を把握するとともに、職員が向上心を持って働けるよう、ワーク・ライフ・バランスに配慮した職場環境や就業条件の整備に努めている	勤務希望を可能な範囲で聞く事や、体調の相談、設備の見直しを行い働き易い工夫をしている。	勤続年数の長い職員が多く、勤務時間や勤務日等、希望に沿った働き方が出来るよう職場環境を整えている。利用者のベッドを電動ベッドに取り換えたことで、職員の身体的負担軽減に繋げることができ、記録の電子化を進めるなど、業務改革に取り組んでいる。	
12	(10)	○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ後の取り組みを模索中。今年は月1回のカンファレンス時にミニ研修を管理者が題材を提供して行っている。外部研修への参加、法定研修の受講支援等、各自が主体的にスキルアップが出来るような体制にもってゆきたい。	管理者は、職員の外部研修受講や法定研修への参加を推奨している。内部研修では管理者が題材を提供し、職員各自で考え、意見交換しながら、有効な研修題材を作成している。毎月のカンファレンスでも学びを重ねながら、個々の力量を高めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
13		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会づくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	隔月開催のグループホーム部会にて交流している。最近では毎年、職員の意見交換会が開催される。また毎月開催のケアマネ部会でも幅広い交流が出来る。これらは今年では集合して行っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
14		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	自立支援、尊厳の保持のもと、対応している。(利用者様に役割日々の暮らしの中に見つけていただけるように対応している。		
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
15	(11)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人一人と向き合い、その人を知り、なるべく希望に添うよう心掛けている。	日常生活の中で利用者一人ひとりに寄り添い、行動や会話から、その人の思いの把握に努めている。集団行動より、一人で塗り絵に取り組みたい人、一日中、外で野菜作りをすることを好む人もあり、常に見守りながら、本人本位の支援に努めている。	
16	(12)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	日々の利用者様の暮らし、それに伴う変化を見ながら、月1回のケースカンファレンスを行い、関係者、家族、本人と話し合い作成している。また定期的に計画の見直しを行っている。	担当者会議に家族の参加はないが、面会時や電話等で介護計画の進捗状況を伝え、LINE等でも意見を聞きながら、現状に即した計画を作成している。計画内容は日々の介護記録ファイルに添付し、計画の実践に努めている。	
17	(13)	○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子、ケア、気づき等を介護記録に記入し、連絡ノートでの職員同士で情報の共有。その後の介護計画の見直しに活かしている。	夜勤帯の個別介護記録は赤字記入で分かり易くし、連絡ノートを活用しながら、職員間で情報の共有を図っている。記録の電子化を進めており、計画内容と連動させることで実践への反映を目指している。現在は、記録ソフトに限界があり課題としている。	
18	(14)	○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その時々、その人に合ったケアサービスを出せる限り行えるよう心掛けている。	週に数回の訪問がある家族もあり、意向を聞きながら対応している。「新聞購読をしたい」という利用者ニーズにも対応している。入浴も、利用者の気分によっては曜日変更で支援している。	

岐阜県 グループホームほのぼの2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	各種ボランティア、五感体操等が定着、月一の囲碁ボランティア、本人が心身の力を発揮し楽しむ支援をしていましたが、コロナによってボランティア組織が消滅している状態です。旧前の状態に戻すべく模索中。		
20	(15)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	内科、歯科については本人と家族の同意の上、協力医をかかりつけ医としている。他科については、希望する医療機関に家族同伴の受診とし、日頃の様子を伝えると共に、受診結果報告を受け連携を図っている。	利用者は、協力医をかかりつけ医とし、月2回の往診を受けている。専門医や他科への受診は家族同行とし、情報を共有している。ケアマネジャーは看護師でもあり、適切な健康管理を行いながら職員にも伝達し、協力医と連携を図っている。	
21	(16)	○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	中津川市共通の情報提供書や、事業所のサマリーを作成し渡している。また、入院後の連絡もケースワーカーと取り合う。	日頃から医療機関との関係づくりに努め、入退院時には利用者や家族の思いに寄り添った支援を行っている。利用者の精神状態が不安定な時は、入院先の医療機関と情報交換しながら、家族の理解を得て対応している。退院後は薬のコントロール等をしなが、穏やかな日常生活を維持できるよう支援している。	
22	(17)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合や終末期の支援については、医療機関と家族の協力等、取り組んでいる。看護師による点滴も必要時可能。入居時に本人、および家族に事業所の方針を伝え、確認をとっており、さらに状態に応じて意向を聞き直し、対応方針の共有を図りながら支援している。(同意書を作成)	看取り指針があり、家族にも説明している。特別な医療行為のない自然な形での看取り支援に取り組んでいる。2名の看護師職員を配置しており、点滴等の対応も可能である。重度化した場合は、家族の宿泊も可能とし、医療機関と連携しながら支援している。	
23		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	地域の防災訓練に参加し、地域の方と共に応急手当、AED使用講習に参加している。定期的に救命講習を行っている。		
24	(18)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の自主避難訓練および消防署立会いの訓練にも利用者が参加し、有事の際には速やかに対応出来る体制が整っている。また、災害発生時必要な備蓄品も準備が出来る。	緊急時には、利用者の病歴や連絡先等を書いた物を入れて、すぐに持ち出せるようにした「命のボトル」を設置し、防災頭巾も用意している。運営推進会議でアドバイスを得て、現在、事業所の実情に即したBCPを作成中である。	管理者はBCP作成に際し、厚労省サイトのひな型を使うのではなく、事業所で実際に運用できる物をめざしており、その姿勢を評価したい。災害時ははじめ、感染症の対応等に適応できるBCPの作成に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
25	(19)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	自立支援、尊厳の保持のもと対応し、職員同士も言葉遣い等に注意している。	利用者一人ひとりの人格と、「個」を尊重した対応をするために、理念である「その人に寄り添い、その人を知る」を基本に支援し、尊厳の保持につなげている。不適切な態度や声掛けは職員間で注意喚起し合い、対応している。	
26		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の生活にて利用者様と多く会話をする事を心掛け、その人に合わせた声掛けや、本人の言葉を引き出す努力をしている。		
27		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者様に合わせた声掛け、言葉に耳を傾ける。生活の流れの中で、無理無く、安全な範囲で自由にさせていただいている。		
28	(20)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	無理ない程度に声掛けし、食事の配膳、片付け等をしている。	事業所で採れた野菜や近隣からの差し入れを活用し、三食手づくりの食事を提供している。物価高騰の中にあっても、献立を工夫しながら、これまでの食事代を維持し、職員も同じものを一緒に食している。今年は花見行事を実施し、久しぶりの外食を楽しむ様子を家族にも報告している。	
29		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	3食の食事と2回のおやつを基本に、摂取状況をみながら、水分摂取の味の工夫、食事形態の工夫、栄養ゼリーの活用。必要時のチェック表の活用をしている。		
30	(21)	○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後のうがいはじめ、歯磨きをしていただき、義歯の方はポリドント消毒を使用している。	職員は口腔ケアの必要性を理解している。歯科の往診もあり、食後の口腔ケアを励行している。洗面台に備えてあるコップや歯ブラシの衛生管理にも注意を払っている。	

岐阜県 グループホームほのぼの2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	利用者個々の排泄習慣を把握し、本人の様子を見ながらトイレ誘導を行っている。また利用者の自尊心に配慮した対応を心掛けている。		
32		○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	利用者自身で出来る事はして頂き、本人の気持ちや誇りを大切に支援をしている。なるべくゆったり入浴していただけるようにしている。入浴不可時は清拭施行。汚染時、発汗の季節都度シャワー浴等施行。		
33		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	ホールに大きなソファを設置し、いつでもくつろげる空間を作っている。入床前は各自のベットを整える。温度管理。		
34	(22)	○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	担当者を決めて、必ず確認している。チェック表の使用。変化があれば、服用前に看護師に指示を仰ぐ。お薬説明書がいつでも閲覧出来るようにしている。	薬剤師から薬を受け取り、配薬時は担当を決めてチェック表で確認しながら、誤配を防いでいる。本人が飲み終えるまで確認しており、ヒヤリハットは起きていない。薬の変更時は連絡帳で徹底させ、利用者の様子を共有している。	
35	(23)	○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	その人が得意としている事や、趣味も考慮しながら生活している。掃除道具、ゴミ集め、洗濯伸ばし、畳み等役割がほぼ決まっている。	利用者の役割が自然と決まってきたり、日常生活の中で定着している。職員が、新聞紙でのごみ箱作りを依頼すると、出来る人が一緒になって作業をしている。一つの事にこだわり、集中して取り組む利用者もあり、職員間で見守っている。	
36	(24)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	気候の良い時期には玄関先で歌を歌う等、外気に触れる機会を作っている。また週に1度はドライブで気分転換を図っている。コロナで利用者様の外出は極力少なくなっていたので機会創出を図っている。	毎週火曜を「ドライブの日」としている。コロナ禍では車外に出ることは控えているが、継続しながら、気分転換を図っている。今年の春は花見外出を実施し、利用者が笑顔で開放感と季節を楽しむことが出来ている。徐々に外出の機会を増やしている。	

岐阜県 グループホームほのぼの2号館

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	基本的には、なくなっても良いということを家人、本人了承の上、少ない金額を持ってもらう。希望時には、一緒に買い物に行く。一人のみ自己管理可能な方がみえ、毎月決まった金額を渡している。		
38		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	事前に家人の了承をとり、協力してもらえるようにたのんで、希望時対応している。家族より電話の希望があれば、対応している。		
39	(25)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	履き出しの窓が北側全体にあり、風通しの良い作りで、周囲は自然に囲まれ、季節によって木々の色や、花がみられる。利用者が心地良くなるよう、歌謡曲を流したりする。ホールには炬燵の設置もしている。	ホールは天井が高く、開放感がある。大きな窓から外の景色を眺めながら、季節を感じることができる。炬燵テーブルは、ソファーに座って足元を温めることもでき、テレビを見ながら団らんの場所になっている。現在、物置状態になっているホールの一角を、有効活用できるよう模索中である。	
40		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに大きなソファーを設置し、いつでもくつろげる空間を作っている。履き出しの窓が北側にあり、建物の構造上風通しがよい。利用者様の気の合った方同志が座ったり、各々が好きな場所で過ごせる様にしている。自室で過ごす事も出来る。		
41		○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	馴染みの物の持ち込みを説明し、可能であれば持参してもらう。家族の写真を飾る等。(湯呑、箸、茶わん等。)		
42		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来る事、出来ない事シートの活用、本人に無理なく自立に少しでも近づけるように声掛け、介助を行っている。		